

お客さまのご要望にお応えするため、 日々技術を磨きます

株式会社サンテック東北支社

執行役員 東北地区担当支配人 松本 薫



ご挨拶

日頃より弊社事業にご理解・ご支援を賜り誠にありがとうございます。また、この度「東北活性研」への寄稿の機会を賜り大変光栄に思っております。私は(株)サンテックで東北地区の送電線工事を統括する松本と申します。この貴重な機会に弊社の沿革や最近のトピックスを紹介させていただき、これが皆さまとの良好な関係構築に役立てば大変幸甚に存じます。

沿革

弊社は1937年、広島市で初代社長の八幡貞一が土建業を行う「満長組」を創設したことを起源に、その後1948年に「山陽電気工事(株)」として法人化を図り産声をあげました。そして1956年の本社東京移転、1973年の東証二部(現スタンダード市場)上場、1975年の海外進出、1992年の「(株)サンテック」への社名変更等を成長の節目とし、現在、6代社長八幡信孝のもと、従業員1,475名(連結、2025年3月末現在)、事業拠点国内23箇所、海外9箇所を擁する企業に成長しております。事業の幅も、架空送電線工事から、電力設備においては地中送電線、変電、配電線、再エネ設備の工事、電力外設備ではビル等の内線工事、空調・管工事、さらにはプラント設備の設計・施工にまで拡大しております。また、自社工場を保有して電力用接地金具等の製作も手

がけており、この接地金具は着脱に関するフェイルプルーフ機能を有し、誘導感電防止になるとして東北電力ネットワーク(株)様他全国の送電業界の皆様にご愛顧いただいております。

至近の会社業績

至近の業績に焦点を当てますと2022年度、2023年度はコロナ禍の影響もあり国内外とも厳しい状況でしたが、2024年度は国内電力部門基幹系送電線工事の本格稼働、国際部門、内線部門の粘り強い営業努力の結実等により何とか黒字回復を果たしました。2025年度においては国内電力部門の大型工事の順調な進捗、国際部門のデータセンター工事の増大等により、10月27日に業績予想の修正(増益)を公表でき、これより翌日の10月28日に日本株値上がり率ランキング第一位(28.65%)を記録させていただきました。本件を通じて経済界の皆様方の僅かな市場情報も見逃さないアンテナの高さに大変感服するとともに、一過性とは重々承知しつつも記録への刻銘を嬉しく感じており、この経験を糧として今後も頑張ってまいります。

東北地区の送電線工事

さて、ここからは私が分掌する東北地区送電線工事の紹介になります。工事遂行にあたっては、発注者である東北電力ネットワーク(株)様を

はじめ、多くの会員企業の皆様にお力添えをいただき、まずはこの場を借りて心より御礼申し上げます。現在、弊社は、東北-東京連係プロジェクトの500kV 宮城丸森幹線新設の第2工区(鉄塔35基、架線16.1km)、および、東北北部エリアの次世代エネルギー安定供給を目的とする500kV 出羽幹線新設の第3工区(鉄塔20基、架線7.9km)の2つを主に工事展開しております。宮城丸森幹線は深山部のためにヘリ物輸採用比率が他よりも高い工区を担当しており、天候に左右されがちなヘリの運航計画を含めて綿密な工程調整会議を行いつつ1日150名近くの作業員が稼働しております。毎日10班を優に超える作業体制であり、東北以外の弊社職員の応援も得ながら安全管理・品質管理に細心の注意を払い、一つ一つの作業を着実に進捗させております。仙台から山形方面に高速山



宮城丸森ヘリ物輸

形道を通りますと、笹谷トンネルの少し手前で上空横断の送電線工事を目にしますが、これも当該工事の弊社分掌箇所です。

次に出羽幹線ですが、至近に工区内で最も傾斜がきつい箇所の基礎工事を完了いたしました。写真を示しますが、斜面の上端尾根に2脚、上部クレーンステージの若干下部に2脚、計4脚の鉄塔基礎部が視認できます。このような脚配置に対して施工を行うために「マルチアングル工法」という最新の仮設ステージ建設技術を用い、大



出羽マルチアングル工法ステージ敷設

型のジブクレーンを2台据え付けたのが本写真の状況です。上部のクレーンは通常の鉄塔基礎工事に用い、下部のクレーンは鉄塔脚よりさらに下部にある資材置場より上部クレーン稼働範囲に資器材を運ぶ中継用となります。基礎工事終了後はこのジブクレーンを撤去し、クライミングクレーンという鉄塔組立用クレーンに据付け替えを行います。非常に手間はかかるのですが、悪条件下でもお客さまのご要請に応えるべく技術を駆使して送電設備を建設しています。

おわりに

簡単ではありますが、弊社の沿革やトピックス等を紹介させていただきました。AI技術の進展に伴い、データセンターへの大容量かつ高品質な電力安定供給が不可欠な現状において、送電工事業界への要求事項もますます高度化しています。弊社としては、こうした要請に応えるべく現場技術力を進化させ、対応できる力を蓄えてまいりたいと考えております。皆様からのご要請やご助言をいただきながら、現状に甘んずることなく、しっかりと自己研鑽を続けていく所存ですので、今後とも末永いご支援を賜りますようお願いいたします。最後に、東北活性化研究センター様のますますのご発展を心より祈念し、結びとさせていただきます。